

A Study on the Archive Method of the Kabuki Make-up

松永, 孔梨子
Faculty of Design, Kyushu University

<https://doi.org/10.15017/17124>

出版情報 : 九州大学, 2009, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :



第6章
総括

第6章 総括

本章の概要と目的

本章では、本研究の総括を示す。6.1節では、結論として、歌舞伎化粧の伝承方法としての本手法の成果について述べる。6.2節で今後の課題および展開について述べ、本論文のまとめとする。

6.1. 結論

本論文では、役者の「わざ」が伝えられ発展してきた歌舞伎化粧の伝承のための記録方法を提案し、また実際に記録をおこなった。

記録方法の提案では、歌舞伎の伝承に用いられる「型」の構造を基にし、「わざ」に関わる要素のデジタルデータからなる「型」として歌舞伎化粧を記録し、時代ごと、役者ごとの比較をおこなうことによって積み重なる「わざ」を記録できることがわかった。また、役者への取材や舞台照明に関する調査をふまえ、役者の顔形状や、化粧料の反射特性など、化粧の「型」を構成する要素を得ることができた。

また、本手法による歌舞伎化粧の記録では、「型」の構成要素のデータ化をおこなうことができ、取得したデータを応用し、歌舞伎化粧を、役者の個人的な顔形状、化粧料の物質的な情報などとともに「模型」と「3DCG」で再現することができた。さらに、記録の更なる展開として、照明光のデータをろうそくの照明光のデータと置換することによるろうそく舞台における化粧の再現ができた。

歌舞伎化粧の記録手法の提案、また記録の実践をおこない、化粧料の反射特性や光源のモデル化、モニタにおける色再現の問題などを通して、歌舞伎化粧の記録、再現にあたり、その方法や、必要なことが明らかになった。これにより歌舞伎化粧の記録に際し、その基盤が構築されたといえる。

形のない「わざ」を含めた歌舞伎化粧を伝承していくためには、形式的な要素からなる「型」として、時代ごとや役者ごとに記録をおこない、比較することが必要であるため、本手法を用い、継続的に記録をおこなうことが重要となる。本論文でおこなった歌舞伎役者の個人的な顔形状と併せた化粧の記録や、ろうそく舞台での再現を拡張し、時代ごと、役者ごと、また同じ役者の日々の化粧の違いなど、様々な条件で記録を比較することで多角的な「わざ」の情報を抽出し、捉えることの難しい「わざ」を浮き彫りにすることが可能である。また、多角的な「わざ」の情報の抽出のためには、本論文で定めた「歌舞伎化粧の構成要素」以外の要素についても検討する必要がある。様々な要素を検討し、継続的に記録をおこなうことで、伝承されるべき化粧の「わざ」の情報を保存していくことがで

きる。

また、本手法では照明環境や化粧料など、状況に応じた化粧の見えを再現することができる。役者のための化粧のシミュレーションができるコンテンツとして本手法を発展させることで、役者の新しい「わざ」を考案に用いられることも考えられる。役者の「わざ」を喚起するようになれば、本手法は記録の一手法であるとともに、新しい歌舞伎化粧の「型」としての役割を持つこととなる。このためには、歌舞伎役者や舞台関係者など、歌舞伎に関わる方々の意見をもとに、「わざ」と「型」の関係をさらに模索する必要がある。

本研究を通し、「わざ」を保存し、伝承していくためには、更なる調査を重ね、多角的なデータの取得をおこない、その応用を検討する必要があることがわかった。技術的な側面からのアプローチによる形のある情報の記録の際も、その奥にある形のない「わざ」のような精神的な部分にどう踏み込んでいくかに焦点を当てながらおこなうことが必要である。計測や記録ではとらえることの難しい役者の「わざ」の本質に技術の側面から迫ることは、さらに新しい「わざ」の発明にもつながる可能性がある。本研究が歌舞伎の発展に貢献できることを期待している。

6.2. 今後の課題および展開

今後、本手法を積極的に使用していくことで、歌舞伎化粧の伝承手法として本手法の有効性を検討することが必要である。歌舞伎役者、専門家を含めた構成要素や再現手法の検討とともに、積み重なる「わざ」を記録するため、今後本手法により継続的に記録をしていく。そして、記録を多角的に比較することにより、「わざ」に関わる情報を提示していくことが重要である。

また、再現性の向上が課題である。3DCGによる歌舞伎化粧の再現では、構成要素のうち、化粧のパターンの記録が不十分である。化粧のパターンは、役者の顔形状とともに本人の工夫が反映される、役者独自のものであるため、役者が自分の顔に化粧を行ったパターンを記録する必要がある。光反射特性の計測に関しては、白粉だけでなく、紅やトノコ、墨など他の化粧料についてもおこなう必要がある。このとき、sRGB モニタ再現外である紅、ろうそくのモニタによる色再現も問題である。さらに、芝居小屋の幾何構造、照明の位置や方向、観客の目線を含めた舞台環境のモデル化も重要である。

模型による歌舞伎化粧の再現では、素材の検討をおこない、紅をはじめとした化粧料を模型に施した時の発色を向上させることが課題である。また、演技における表情変化の模型における表現も課題である。kwon らは、顔面の筋肉の動きを考慮し、人間の表情をコード化した FACS(Facial Action Coding System)^[51] をもとにアニマトロニクスによる顔表情の表現のためのアクチュエータの動きを記述する MU(Moving Unit) を提案している^[52]。これは人間の表情筋構造を背景としているため、MU を用いることであらゆる人間の表情を表現することが可能であり、見得の複雑な筋肉の動きを表現するために有効であると考えられる。「模型」を見得の表情変化を行うアニマトロニクスへ応用することで、模型において演技中の表情変化を表現することが必要である。

また、記録データの再編・展開としておこなったろうそくの照明下での歌舞伎化粧の再現はいまだ不十分である。光の減衰や揺らぎなどのろうそくの照明光のモデル化をおこない、ろうそくや天窓の照明の位置情報を舞台の幾何学的情報をともに再現をおこなう必要がある。また、鉛や水銀でできた当時の化粧料^{[53][54]}の模型に対する再現や、反射特性の計測、化粧方法の情報をを用い、歴史的な歌舞伎化粧のシミュレーションへ応用することが必要である。